

演題番号：A6

眼の異常を主訴に来院したリンパ腫の猫の1例

○田端克俊

やまびこ動物病院

1. はじめに：リンパ腫は猫で最も多く報告されている悪性疾患であり、幅広い年齢に発生し、発生部位や症状も多岐にわたる。今回、眼病変を主訴に来院し、後にリンパ腫を疑った猫の1症例について、その経過を検討する。

2. 材料および方法：症例は雑種の猫、去勢雄、4歳3か月齢。左目の異常と2週間ほど前から持続する軟便と食欲低下を主訴に来院した。左眼の虹彩に乳白色の腫瘤病変とそれによる瞳孔の歪みを認めた。X線検査では上腹部に腫瘤病変を疑う不透過性陰影を認めた、超音波検査でも小腸の一部で層構造の消失と腫脹を認めた。両側の腎臓の外形の不整を伴う腫脹を認めた。腫脹した小腸壁と腎臓からFNAでは多数のリンパ球系細胞が採取された。以上の所見より小腸の腫瘤病変と腎臓病変はリンパ腫を疑い、眼病変もその転移病変ではないかと考えた。

3. 結果：治療は当初はプレドニゾロンの投与のみであった。第5病日には眼病変は消失し、一般状態も良好であったが、超音波検査では小腸の病変は不変であったため、第40病日にCHOPベースの多剤併用化学療法を計画し、ピンクリスチンを投与し、プレドニゾロンは減量した。第47病日、食欲

廃絶と歩行不全や眼振などの神経症状、左右下顎リンパ節や腹腔内リンパ節の腫大、小腸病変の増大を認めた。中枢神経系への転移を含むリンパ腫の進行を疑い、第54病日にACNUの投与を実施したところ、若干の神経症状の改善を認めたが、腹腔内の小腸病変やリンパ節には著変を認めなかった。第79病日、食欲廃絶と眼振を再び認めたため、プレドニゾロンを増量し、2回目のACNUの投与を実施した。第83病日にはL-アスパラギナーゼの投与を実施した。これらの治療は奏功することなく、第108病日、症例は自宅にて死亡した。

4. 考察および結語：猫の眼球に発生した腫瘤病変の鑑別診断としては、悪性黒色腫や化膿性眼球炎、リンパ腫などが挙げられるが、それらの治療法は全く異なる。本症例の眼病変は、全身的な精査により小腸や腎臓などの複数の組織からリンパ腫を疑う所見を得たことや、治療に対する反応から、リンパ腫の転移病変であったと考えられた。リンパ腫は発生部位によって予後が大きく異なることも知られており、診療に際しては局所の病変だけにとらわれず、動物全体の情報を俯瞰してみるものの大切さをあらためて痛感した症例であった。